

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

		要 旨
学位申請者	花形 美緒【論文博士】 【ジェンダー学際研究専攻 平成20年度生】 (平成29年3月31日 単位修得退学)	<p>近年我が国では、生活面・経済面で自立できる若者が減少してきており、小中学生の不登校や若者の引きこもりなども増加傾向にある。このような状況の中で、多くの母親たちは子どもの成長段階に応じた自立を目的として子育てを行っている。しかし、これまで子どもの成長段階に焦点をあてて、母親の世話・教育役割の変遷プロセスを検討した研究はあまり見当たらない。この背景をもとに、本学位申請者の研究では、日本の母親が子育てを通してどのように親役割や子どもとの関係を変化させていくのかを、子どもの生活自立という視点から明らかにすることを主な目的としている。具体的には、自身が収集した量的データ（幼少期から高校生の子どものを育てている母親 502 名）とヒアリングデータ（離家した子どもを持つ母親 16 名）を分析し、子育て期からエンブティネスト期までの母親の世話・教育的役割の転換や縮小について検討した。量的データは主にパス解析、質的データはキー概念を抽出する方法を用いて分析を行なった。</p> <p>主な結果として、子どもが女子である場合、子ども数が多い場合、就業している母親の場合は、子どもへの生活自立促進行動頻度を有意に高めていることがわかった。また、子どもへ生活自立を促す母親は親として成長したと感じ、その結果、自身の子育てを肯定する傾向にあることも明らかになった。子どもの離家後は若年成人である子どもの生活力を心配することが母親のストレス源になっていたが、母親以外の役割やアイデンティティが強い場合は、子どもの離家からの影響は軽減される傾向にあった。</p> <p>本論文は以下の点で高い評価が得られた。第一に、母親の子育て充実感を子どもの家事遂行という生活的自立とライフコースの視点から量的及び質的データ分析を通して検討したことである。第二に、母親の役割移行について、その変化の内容や葛藤について新たな知見を得たことも評価された。第三に、親役割について、親が行なう家庭教育とフォーマルな学校教育がどのように連携することが効果的なのかの示唆を得たことである。第四に、子どもの離家後の母親が喪失感に陥らずに、子育て達成感を得るメカニズムを解明できたことである。</p>
論文題目	子どもの生活自立をめぐる母親の役割移行	
審査委員	(主査) 教授 石井クンツ 昌子	
	教授 藤崎 宏子	
	教授 小玉 亮子	
	教授 菅原 ますみ	
	准教授 斎藤 悦子	